

『三国志演義』に見る道教的イメージ

井 波 律 子

国際日本文化研究センター

『三国志演義（三国演義）』は周知のごとく、十四世紀の中頃の元末明初、不遇の知識人羅貫中（生没年不詳）によって完成された。羅貫中は、千年以上にわたり、語り物や芝居など民間芸能の世界で語り伝えられた数々の「三国志物語」を収集し、これらを『正史三国志』をはじめとする正統的な歴史資料と照合して、極端に荒唐無稽な要素を抜き取り、文章に磨きをかけて整理・集大成して、白話長篇小説『三国志演義』を完成したのだった。

こうして完成された『三国志演義』は、二つの基本的な物語構想を軸として形作られている。一つは、曹操の魏、劉備の蜀、孫権の呉の三国のうち、後漢王朝の血筋を引くとされる劉備の蜀を正統とすること。いま一つは、劉備を徹底的な善玉として中心に据え、悪玉・敵役の曹操と対比させながら、物語世界を展開させていることである。

善玉劉備の周囲には、義兄弟の二人の豪傑関羽・張飛、天才的な軍師の諸葛亮をはじめ、劉備の人柄に惚れ込み、彼のために命懸けて尽くす臣下が顔を揃えている。『演義』前半は、これら臣下との信頼関係に支えられた劉備が、力において圧倒的に勝る曹操に抗し、蜀に自立の拠点を得るまでのプロセスをドラマティックに描くことに力点を置く。さらにまた、劉備の死後、軍師諸葛亮は劉備の信頼にこたえてその遺子を守りぬき、超大国の魏と戦いつづけた。『演義』後半の物語世界は、この誠実な軍師諸葛亮の活躍に焦点をあてて展開される。

以上のように、「仁君（慈愛にあふれた君主）」劉備、その劉備に忠誠を尽くす臣下たちという具合に、『三国志演義』の中心に位置する登場人物は、いかにも儒教的な色彩に彩られているかに見える。とりわけ、ずばぬけた行政的・軍事的手腕を有しながら、出来の悪い劉備の息子に、死ぬまで誠実に尽くしつづけた諸葛亮のイメージには、一見したところ、理想化された儒家思想・儒教イデオロギーの化身といった趣きがある。しかし、その反面、『三国志演義』に描かれる諸葛亮が、濃厚な道教的イメージを帯びていることもまた、まぎれもない事実である。以下、諸葛亮に焦点を当てながら、『三国志演義』に見る道教的イメージを探ってみたい。

先に述べたように、『三国志演義』は、民間芸能の世界で流布した種々の「三国志物語」を土台にして著されているが、もとになった「三国志物語」のほとんどが滅び去ったなかで、唯一今に残るのは、元の至治年間（一三二一～二三）に刊行された『三国志平話』である。ちなみに、『三国志平話』は講釈師のレジュメをテキスト化したものであり、語りの現場の雰囲気はいきいきと伝えている。この『平話』に登場する諸葛亮は、仙人もしくは魔術師そのもので

ある。たとえば、『平話』はその初登場のシーンで、次のように諸葛亮を紹介している。

諸葛亮はもともと神仙（仙人）である。中年に至った今、目を通さない書物はないほどで、天地の機微に通じ、神鬼（神秘的な存在）も測りがたい志を抱き、風を呼び雨を喚び、豆を撒けば兵士となり、剣をふるえば河となる。

こうした超能力をもつ魔術師としての諸葛亮のイメージは、^{げんきょく}元曲（元代の芝居）に登場する諸葛亮のキャラクターにも共通するものである。

このように『平話』や今に残る諸葛亮物の元曲作品を通じて、元代の民間芸能の世界において、神秘的な能力をもつ超越的な存在としての諸葛亮のイメージが広く流布し、定着していたことがうかがえる。史実と照合し、先行する「三国志物語」の荒唐無稽な要素を除去することを旨とする、『三国志演義』の世界でも、こと諸葛亮に関するかぎり、むしろ積極的に民間に流布する神秘的な諸葛亮のイメージを取り込み、物語展開の重要な鍵としている。

『演義』世界に諸葛亮が初登場するのは、劉備の三顧の礼を受けたときのことである。諸葛亮の評判を聞いた劉備は関羽と張飛を伴ない、^{じょうよう}襄陽郊外、^{りゅうちゅう}隆中の臥龍岡に^{がりょうこう}隠棲する諸葛亮を訪問するが、二度とも不在、三度目にようやく面会を果たすというものだ。ここで、『演義』は、諸葛亮の隠棲地がいかに俗塵を排した清浄な雰囲気^{きんぎょう}に包まれたものであるか、綿々と歌い綴った長い詩を付している（第三十七回）。

（前略）

柴の門は半分閉ざされて、茅草きの^{いかり}廬をかくし
庵のなかには高潔な人が寝そべってまま起き上がろうとしない。
丈の高い竹が重なり合って緑の屏風を成し
春夏秋冬、曲垣には野の花が香しい。

……………

とんとんと戸を叩いて猿が木の実を捧げ
門を守る鶴は夜な夜なお経を読む声に耳を傾けている。

……………

廬のなかの先生は一人ひっそりとすごし
暇があれば、自ら農作業にいそむ

（以下略）

ここに描かれるのは、まさに山の彼方にある「仙界」を思わせる風景にほかならない。この「仙界」の住人たる諸葛亮も隠者というより、むしろ仙人といったほうがふさわしい。先に述べたように、講釈師のテキストである『平話』は最初から、「諸葛亮はもともと神仙（仙人）である」とズバリ言い切っている。作者羅貫中の知識人的フィルターを通して、構築された『演義』の物語世界は、さすがにそこまで単刀直入ではないけれども、この登場詩から見てと

れるように、やはりあらかじめ諸葛亮に神仙的イメージを付与しており、その点では、『平話』の設定を踏襲しているのは明らかである。

実は、諸葛亮を超越的な存在とみなすことは、宋元以来、民間に流布した三国志物語の独創ではなく、すでに六朝時代から始まっている。南朝劉宋の志怪小説集『異苑』（劉敬叔著）に、諸葛亮の超能力をテーマとする話があるのは、その早い例である。諸葛亮超能力者伝説、ひいては仙人伝説が生まれるには、それだけの理由があった。周知のように、諸葛亮は木牛・流馬や強力な石弓などの新兵器を次々に発明した、抜群の科学的才能の持ち主であった。これがまず彼に魔術師的イメージを付与することになったことは、推測にかたくない。

しかし、さらに一步進めて見ると、魔術師あるいは仙人諸葛亮のイメージは、三国六朝時代を通じて知識階層に深く浸透し、一世を風靡した「天師道」との関連で、生じてきたのではないかと思われるふしがある。「天師道」は、後漢末の乱世をもたらす引き金となった、「黄巾の乱」のリーダー張角の唱えた「太平道」とは別系統ながら、やはり同じく道教の一派である。

民衆を教化の対象とした「太平道」に対し、上層階級の知識人に支持された「天神道」は、不老不死を求めて山中で薬草を摂取するなど、きわめて仙人志向の強い宗教であった。『演義』描くところの、諸葛亮の隠棲地、臥龍岡の雰囲気は、この「天師道」が理想とする仙境に類似するものだといえよう。

さらに注目されるのは、諸葛亮の出身地の山東省琅邪が、「天師道」のメッカだったことだ。周知のように琅邪は、古代から神秘的な術を操る方士の多い土地柄である。かの秦の始皇帝もここで方士の徐福らと出会い、その言葉を真に受けて大船団を仕立て、仙人が住むという幻の「東海の三神山」のありかを探求させたのだった。こうした方士の伝統が脈々と伝えられ、「天師道」に結びついたとも考えられる。付言すれば、『演義』のスターの一人、呉の孫策（孫権の兄）は、于吉という道士に祟り殺されるのだが、この于吉もまた琅邪出身の道士だったとされる。

諸葛亮が、この神秘的なムードの立ち込める「天師道」の本場、琅邪の出身だったこと。山中（臥龍岡）での隠棲という独特の生活形態。こうした点から見ると、諸葛亮自身、「天師道」となんらかの関わりがあったと考えるほうが、むしろ自然であろう。とはいえ、実際に諸葛亮と「天師道」との関わりを証明する歴史的資料は見当たらない。ただ少なくとも、いまあげた断片的な事実から、諸葛亮と「天師道」的な神秘主義を結びつけ伝説化する傾向が、六朝時代を通じてしだいに広まって行ったことは、まずまちがいないと思われる。

こうして仙人化された諸葛亮のイメージは、長い時間をかけて民間道教の呪術志向との結合を深め、民間芸能の世界において、『平話』や元曲に見えるような超能力の仙人、全知全能の魔術師として結実したものと見える。『演義』もこれら民間で形作られた諸葛亮の超越的イメージを、思い切りよく盛大に活用している。

『演義』の物語世界において、山中の隠棲生活にピリオドを打ち、劉備の軍師になった諸葛亮が、ここぞというときに超能力を発揮し、魔術師として活躍する場面は、それこそ枚挙に暇がないほど見られる。

たとえば、建安十三年（二〇八）冬十二月、「赤壁の戦い」で、周瑜の率いる呉軍が曹操軍

に火攻めをかけるに先立ち、諸葛亮は「七星壇」を築いて天に祈祷し、この季節にはめずらしい東南風を吹きおこしたこと（第四十九回）。魏の黄初三年（二二二）、関羽の復讐を期して呉に出撃した劉備が惨敗を喫したさい、これを追撃した呉の陸遜は、諸葛亮が前もって石を配して作っておいた魔方陣の「八陣」に、迷いこみ出られなくなってしまったこと（第八十四回）等々は、その代表的なものである。

また、『演義』の第八十七回から第九十一回までは、諸葛亮の「南中征伐」について、筆を費やしているが、このくだりの諸葛亮のイメージはまさに大魔術師というほかない。蜀の建興三年（二二五）、諸葛亮は南中（雲南省と貴州省）に遠征し、激しく抵抗する原住民のリーダー孟獲を、七たび捕らえ七たび釈放して、ついに心服させみごと南中を平定した。『演義』は、このときフィクショナルな物語幻想を大々的に膨らませ、大魔術師諸葛亮が秘術を尽くして、孟獲が繰り出す魔術師どもの術を次から次に打ち破ってゆくさまを、はなばなしく描きあげるののである。

さらにまた、建興五年（二二七）から建興十二年（二三四）まで通算八年、諸葛亮は魏に戦いを挑み、つごう六回の北伐を敢行した。このときも、『演義』は、「空城の計」を使い、「鶴氅（鶴の羽で作った衣）」「綸巾（隠者のかぶる帽子）」という仙人モードで、物見櫓に上って、ゆったり琴を弾き、ライバルの魏軍のリーダー司馬懿を巧みに欺く（第九十五回）など、変幻自在の諸葛亮の姿を活写している。

仙境を思わせる臥龍岡の住まいから、『演義』に登場し、上記のように次々に奇跡をおこし、超能力者、魔術師として、物語世界を揺り動かしした諸葛亮は、退場するときも、やはりこのうえなく神秘的ムードに包まれている。

建興十二年（二三四）二月、諸葛亮は満を持して第六次北伐に踏み切り、武功郡五丈原に本陣を敷いた。しかし、魏軍のリーダー司馬懿は守りに徹して応戦せず、膠着状態が続くうちに、諸葛亮は重病にかかった。

『演義』第百三回には、星座を観察し死期が迫ったことを直観した諸葛亮が、北斗星に祈り延命を乞う儀式を行うさまが、克明に描かれている。まず陣幕を張りめぐらし、腹心の部将姜維に、黒装束に身を固め黒旗を手にした七十七四十九人の鎧武者を率いさせて、幕の外を守らせる。そのうえで、幕のなかに一人こもった諸葛亮は、「罡に歩し斗を踏んで（北斗七星の形に歩むこと）」、北斗星に祈る。幕のなかには、大きい灯明七個と小さい灯明四十九個が配置され、その真ん中に「主灯（本命灯）」が置かれている。この「主灯」が、祈祷が功を奏したかどうかを測るバロメーターになるのだ。もし祈祷期間の七日の間、主灯が消えなければ一紀（十二年）命を延ばすことができるが、消えれば死ぬしかない。

諸葛亮は昼は病軀をおして軍務を処理し、夜は幕のなかで必死に祈祷した。ところが六夜めにハプニングがおこる。かねて諸葛亮と北伐の作戦で対立していた部将魏延が、無神経に幕のなかに踏み込んで来て、せっかくそれまで煌々と灯っていた主灯を消してしまったのだ。延命の望みを断たれた諸葛亮は、死後に備えて手配りを終え、建興十三年（二三五）秋八月、ついにこの世を去った。

ここに描かれる、諸葛亮の呪術的な祈祷の儀式に見られる北斗信仰も、実は道教的な発想に

もとづくものにほかならない。仙境もどきの臥龍岡の草廬といい、北斗信仰にもとづく延命の儀式といい、『演義』の諸葛亮は、実に、その登場から退場に至るまで終始一貫して、道教的な神秘主義に濃厚に彩られているのである。

先にも述べたとおり、『演義』は、劉備の三顧の礼に感激して軍師となり、知謀のかぎりを尽くして「天下三分の計」を実現させ、劉備亡き後はその信頼に答えて、暗愚な二代目劉禪を守りぬくなど、儒教的な忠義の化身としての諸葛亮の姿も遺漏なく表現している。しかしそれよりも、『三国志演義』の物語世界では、いまあげた例からも明らかなように、民間道教の呪術志向を体現した、超能力者あるいは魔術師としての諸葛亮のイメージのほうが、はるかに強烈なのだ。

それは『演義』の作者が、「諸葛亮はもともと神仙である」とする『平話』に代表される、民間芸能のなかで育まれた諸葛亮像を、積極的に物語世界のなかに取り込もうとしたことを示している。民衆世界のエンターテインメントでは、忠義一徹の堅苦しい諸葛亮より、風を呼び人工獣を駆使し、北斗星に呪文を唱えて宿命さえ変えようとする、超能力のスーパーマン諸葛亮に人気があったのは、想像にかたくない。『演義』は、そんな人々の夢の結晶としての、パワーにあふれる諸葛亮像を生かし、さらに念入りに潤色したといえよう。

『三国志演義』の作者は上記のように、諸葛亮のキャラクターに、民間道教的な要素をふんだんに盛り込んでいるが、これ以外にも、『演義』は随所に道教的なイメージを散りばめ、物語展開に変化とアクセントを付けている。

そもそも、『演義』は、第一回の冒頭において、後漢末、道教の一派「太平道」の教祖張角^{ちやうかく}（彼もまた『演義』では魔術師である）が信者を組織し、「黄巾の乱」をおこすに至った経緯を記す。史実では、宦官がのさばり腐敗しきった後漢王朝の屋台骨を揺るがす「黄巾の乱」を契機に、時代は群雄割拠の乱世へと突入する。こうした歴史的な文脈を踏まえながら、そのオープニングにおいて、『演義』は張角に破壊的な魔術師の役割をふりあて、彼の率いる黄巾軍が中国全土を混乱の渦に巻き込むさまを念入りに描く。これを皮切りに、いよいよ波瀾万丈、疾風怒濤、ただならぬ様相を帯びた『三国志演義』の物語世界の幕が切って落とされるという仕掛けである。

このほか、『演義』の世界では、敵役である魏のリーダー曹操および呉の若きリーダー孫策（孫権の兄）の周囲にも、魔術（方術）を使う道士や方士が出没する。しかし、孫策の場合は神秘的な術を操る道士の于吉を嫌い処刑したためにその崇りで死んだとされ、曹操の場合も方士の左慈^{さし}にはさんざん嘲弄されるわ、ほとんど魔術的な術を駆使する医者^{いしや}の華佗を殺害したため、持病の頭痛に悩まされつづける羽目になるわというふうには、これら道教的な超能力者と対立し、リスクを負うことになる。

『三国志演義』中、随一の道教色を帯びた大魔術師が諸葛亮であることは論を待たない。劉備が窮地を脱し、自立することができたのは、ひとえにばぬけた超能力者諸葛亮の尽力によるものであった。つまるところ、『三国志演義』は、劉備にのみ諸葛亮という大魔術師と結び付き幸運を付与し、劉備と対立する曹操や孫権の兄孫策に対しては、逆に魔術師に足を引っ張

られる悪運を付与しているのである。いかにも、劉備最良の『演義』らしい展開というほかない。

以上、諸葛亮のイメージを中心に、『三国志演義』に見る道教的イメージをたどってみた。民衆世界で流布した無数の三国志物語を集大成した『三国志演義』は、民間道教のさまざまな要素を積極的に取り込み、物語世界を活性化し、大いに興味を盛り上げているのは、明らかだった。ただ、『演義』のキーコンセプト、基本的な構想は、やはり仁君劉備とその忠実無比の配下関羽・張飛・諸葛亮らの、けっして裏切り裏切られることのない関係性を称揚するものである。その意味で、『演義』の物語世界を裏から支える基本的イデオロギーは儒教的なものであり、道教的イメージはあくまで物語展開の平板化や硬直化を突き崩し、変化を付けるために導入されたものであることを、最後に付け加えておきたい。